

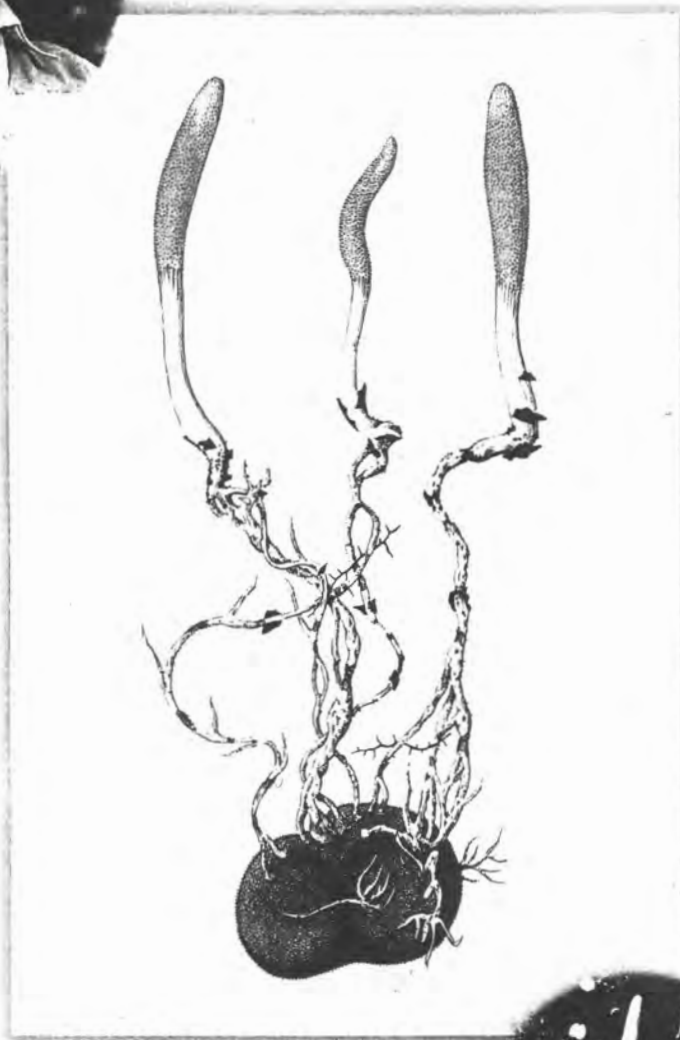
企画展

清水大典と冬虫夏草



平成19年

4月28日(土) ~ 6月24日(日)



開館時間

午前9時～午後4時30分(入館は4時まで)

休館日

5月7日以降の月曜日および5月8日

入館料

大人300円 学生150円  
高校生以下および障がい者は無料

山形県立博物館

山形市霞城町1番8号(霞城公園内) 電話 023-645-1111

しみず だい すけ  
清水 大典



略 歴

- 1915年12月6日 埼玉県に生まれる  
1933年3月 埼玉県立秩父農林学校卒業  
1933年4月 埼玉県三峰高山植物園勤務  
1936年4月 東京大学附属小石川植物園勤務  
1940年4月 満州国大陸科学院植物研究室勤務  
1945年5月 東京大学附属小石川植物園勤務  
1947年4月 埼玉県椎茸農協連椎茸試験場勤務  
1951年12月 財団法人服部植物研究所勤務  
1957年12月 米沢市の職員となる  
以後、米沢市立博物館、白布温泉熱帯植物園、  
米沢市立図書館などに勤務  
1968年11月3日 斎藤茂吉文化賞受賞  
1983年12月 「冬虫夏草図譜」出版  
1994年12月 「原色冬虫夏草図鑑」出版  
1997年9月 「カラー版冬虫夏草図鑑」出版  
1998年8月19日 米沢市で逝去

1932年にセミタケの標本を初めて入手したのをきっかけに、冬虫夏草の研究をはじめ。秩父農林学校卒業後、東京大学附属小石川植物園、満州国大陸科学院植物研究室、財団法人服部植物研究所などに勤務。とくに菌類やコケ類の分類を研究した。1957年奥様の郷里である米沢市に住居を移し、市職員となる。以後、米沢市立博物館、白布温泉熱帯植物園、米沢市立図書館などに勤務しながら自宅で冬虫夏草の研究をおこなう。山形県をはじめ全国各地、さらに台湾、ニューギニア、オーストラリアなどで冬虫夏草の調査をおこなった。

冬虫夏草の研究で多くの論文を発表、図鑑も3回出版している。冬虫夏草の彩色図はすべて自身により描かれ、寄主や子実体の質感も表現されているすばらしい図である。新種記載は100種以上になり、国立科学博物館の小林義雄とともに発表した。冬虫夏草以外でも、キノコ、山菜、果実酒などの著書を出版するなど多くの成果をあげている。キノコや植物の図も多く描いている。

米沢市ではキノコ展の開催に努力した。また、白布温泉熱帯植物園の開園を指導しのちに園長を勤める。1968年には山形県の文化の向上に寄与したことが認められ斎藤茂吉文化賞を受賞した。

著書

1983年に出版された「冬虫夏草図譜」は小林義雄との共著であるが、その後出版された「原色冬虫夏草図鑑」「カラー版冬虫夏草図鑑」は単独での著作である。冬虫夏草のほかにもキノコ、山菜、果実酒など多くの著書を出版した。これらをあわせると10数点にのぼる。



## 研究者との交流

牧野富太郎をはじめ中井猛之進、本田正次、原寛、佐竹義輔など多くの植物学者、菌類学者と交流した。冬虫夏草の研究では国立科学博物館小林義雄と長年にわたり論文を共著で発表してきた。

植物に寄生する菌類の1属 *Shimizuomyces* は清水にちなむもので小林義雄より1981年命名された。種小名に清水にちなむ名前がついた種もある。植物では1950年に中井猛之進によりチチブフジウツギ *Buddleja shimizuana* が、クモでは1972年に八木沼健夫により米沢市の栗子洞で清水により採集されたシミズサラグモ *Drepanotylus shimizui* が、新種として記載された。



## 彩色原図



× 2

Fig. 64. Hus? Cicadidae (Tinnia japonensis) D. Shimizu Del.  
Loc. 山形県米沢市栗山町 400m 栗子洞 採集日: 1964



× 4

ニシキマンサウ  
*Humaritz japonica* Shibet Zur. form. *flava-purpurascens* Rehd.  
山形県 喜多山麓 (米沢市) 栗山 400m 栗子洞 採集日: Mar. 5, 1965.

(Det. D. Shimizu)

冬虫夏草の彩色図はすべて自身により描かれている。原色冬虫夏草図鑑では398種が取り上げられており、ほとんどすべてに彩色図がある。子実体や昆虫などの寄主の質感も表現されている素晴らしい図である。同じ種について彩色図のほか線図を含めて2-3枚の図を描いている。ほかに、スケッチとして残されたものも数多くある。

冬虫夏草以外にも多くの図を描いている。キノコの図はキノコ図鑑の挿図として使われ出版された。植物の図も多く描いているが、公表されたものはあまりない。

これらをすべてあわせると、二千枚以上の彩色図や線図を描いたことになる。

## 冬虫夏草

中国では、子囊菌門核菌綱ボタンタケ目バツカクキン科冬虫夏草属の菌類の一種 *Cordyceps sinensis* (Berkeley) Saccardo を「冬虫夏草 (とうちゅうかそう)」と呼んでいる。これはチベット高原やヒマラヤ地方の高山地帯で草原の地中にトンネルを掘って暮らす大型のコウモリガ科の蛾の一種の幼虫に寄生する。この菌の子実体を菌核化した寄主をつけたまま採集して乾燥し、漢方の生薬もしくは中華料理の薬膳食材として珍重してきた。冬虫夏草の名称は、この菌が冬は虫の姿で過ごし夏になると草になると考えたことから名づけられた。中国では冬虫夏草属菌の総称としては「虫草 (ちゅうそう)」を用いる。

日本では、「冬虫夏草」のことを冬虫夏草属 *Cordyceps* の菌に加えて、スチルベラ科などの菌も含めた昆虫や菌に寄生して発生する麦角菌類の総称として使われることが多い。しかし、薬学分野では *C. sinensis* のみを冬虫夏草と呼んでいる。

本展示会では、広義の用例としての「冬虫夏草」を使用した。



## 謝辞

昨年度の特別展「新種発見物語ーやまがたナチュラリストのあゆみー」では、冬虫夏草の新種とナチュラリストの1人として清水大典先生を取り上げました。今回の企画展はこれを発展させたものです。清水先生の奥様よし様には資料提供などで大変お世話になりました。昨年末に体調をくずされたとのこと、一日も早い回復を願っております。今回は長女の窪田紀久子氏よりご協力を得ました。また、日本冬虫夏草の会山形支部および同支部長井上晃一氏より保管の資料の提供を受け、この企画展を開催することができました。佐藤育子氏、矢萩信夫氏、東北大学学術総合博物館、国立科学博物館からもご協力・ご助言をいただき、一部の資料提供を受けております。

上記の各氏、各機関に対し厚くお礼申し上げます。